

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 渡 辺 豊 和

論題が示すように本論は建築を記号の一形態とみなし建築が示す種々様々な記号様相又は記号様態を克明に追いながら建築表現の本質を解明しようとしたものである。このことが本論の特徴であるのは言うまでもない。但しこの場合の記号とは主として言語を指すのであり言語学上の基礎事項である能記（語）、所記（意味）、エクリチュール（書記）、レクチュール（読解）、ラング、パロールが建築でも成立することをまず論証している。

建築の意味を重視した最初の運動は機能主義であったが当然建築の所記としては機能が挙げられ、更に構造、技術、形態が示す様々の所記があるが本論では機能についてはル・コルビュジェの「建築をめざして」、構造技術はS・ギーディオンの「空間・時間・建築」、形態はE・カサネリウスの「アントニオ・ガウディ」をテキストとして著者達の言説を解説することがそのまま所記の解明であるとしている。建築が言語を媒介として意味伝達が可能なことをこれ等の著述が証明しているからである。

ラング（通時態）、パロール（共時態）は語と発話であるがラングはコード化された「語」のことであり建築では様式に当たりパロールはその語の使用を言うから様式使用する建築家の設計行為のことでありそれは個性として表れる。エクリチュールとレクチュールは設計図書きとその読みである。

以上のことを前提として次に展開するのは建築の記号としての深度である。言語記号学の創始者ソシュールは記号発信者、受信者ともに語の所記として事物をイメージしているだけであって事物そのものを表徴しているわけではないとした。しかし語が所記としての事物から乖離してしまうこの認識には批判が絶えなかった。が今でも言語学はこのアポリアを克服し得ていない。ところが日本の記号哲学者山元一郎は「コトバの哲学」で1960年代にすでにこのアポリアを難なくクリアしていた。バプロフの「条件反射」を使用し信号強化の階型構造を提示し言語の意味の高次化のメカニズムを解明し、更に比喩の理論を駆使して語の所記である事物（山元は事象という）に還元できる道筋を明示した。百万言ついやしても表現出来ないはずの「象」のことを比喩で一抛に

対話者にわからせてしまう可能性を発見していた。サルトルが指摘していた詩人の物性化した言葉「コトバーもの」のことである。事物（事象）から語は乖離するものではなかったのである。山元の理論を駆使して建築の表現形式の意味伝達メカニズムを解明したのが本論4章である。但し建築を言語の信号強化メカニズムに当て嵌めるのにゲシュタルト心理学の「視覚言語」を媒介としている。「地と図」、「よい形」即ち形態の構造骨格化、形態の強弱といった概念が使用されている。4章は言語記号学のアポリアを克服した画期的な論述である。現代世界的な広がりを見せる建築記号論もこのアポリアにはまっているため具体的事象である「建築」の意味伝達のメカニズムを解明出来ず単なる言語記号学の模倣におちいていた。しかし本論の独自性がこのみにあるのではない。建築全体を物語とみなし物語の構造分析法を媒介として建築の空間構成のメカニズムを解明している。このことこそ先人のなし得なかったことであろう。しかし建築は具体的事象であるから言語空間と重ね合わせるには困難である。それをロラン・バルトの「モードの体系」を援用することで克服している。バルトは多数の人によって書かれたモードを解析してモードの意味論を確立したがその方法は至って単純明快でありしかも対象は衣服という具体的事象であるから建築に援用するには好都合である。

モードや建築について書かれた文章からそのモード（対象）とそれを支持する事項、更に対象を支持する方法（又は様態）の3項目に解析している。たとえば「えりの（S）とじた（V）セウエーター（O）」といった具合である。但しSは支持項、Oは対象項、Vは変移項である。但し本論においては建築では一つ一つの部位を語、一つ一つの単位空間を意味単位とみなしていることもありある空間領域が成立している主目的空間をO、それに至る廊下等媒介空間をV、玄関等の支持空間をSとしても解析していて建築の哲学的意味を空間構成から読み解く方法も展開している。バルトが「物語の構造分析」で提示している諸概念はほとんどそのまま建築の空間構成にも適用出来るがそれも「モードの体系」の援用によって言語表現が具体的事象に還元出来る方途を示しているからである。更に本論ではM・マルタンの「映画言語」を参照し物語と建築を繋いでいる。最後にユングの「元型」を建築に投影し建築表現の意味解析の深部に至っている。具体的事象でもある建築を記号体系として解明し尽くした画期性こそ本論の意義であり本論によって曖昧模糊のままであった建築の空間構成の意味を古代から現代に至る一貫した体系として捉え直し更に言語空間である物語にまで接続し得たのは刮目すべきである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる